

古来、美は、芸術と倫理にまたがる価値概念だった。古代ギリシアにおいて、καλος は、外見だけでなく、品質や人格にも用いられた。ラテン語の bellus はもちろん、これを引き継いだ伊仏英語の bello や beau、beauty も同様である。日本においても、優美・美德と言う。そして、古来、プラトンや儒教において、主知主義の徳育として、美德のアイデアを知ること、人もまた美德になる、と考えられた。

しかるに、ルネサンスにおいて、ピタゴラス・プラトン思想が復興し、ウィトルウィクスの比率調和的な美学が着目され、アルベルティやダヴィンチに多大な影響を及ぼし、デカルトやスピノザもまた人間の心の理性的均衡を美德とした。ところが、下位理性としての感性の考察を試みたバウムガルテンは、曖昧混雑な印象的思念を扱うに当たって、イメージの協感によって美德が生じるとし、作品を通じ、これを観客に伝えようとした。つまり、彼は芸術に徳育の意味を切り拓いた。しかし、この後、カントは混雑を不純として退け、主観無関心下での合目的性として美德をふたたび人間から切り離してしまった。

一方、本邦では和歌が芸術文化の中心だった。呪術的な言霊信仰の下、それは赤心の「心ばえ」を示すとされ、恋愛相聞はもちろん宮廷行事の折々にも歌を詠むことが求められた。歌は書き留めた短冊の作品としてではなく、口伝で広められ残された。後世に文章化される場合にも、詠み手がその歌を詠んだ事情や背景などが「詞書(ことばがき)」として添えられた。つまり、歌は独立作品ではなく芸術行為(パフォーマンス)だった。

限られた音韻数で表現を豊かにするために、平安時代から折句や見立、縁語、掛詞、本歌取のような修辞法が発達。これらはバウムガルテンの言うイメージ協感であり、意味に立体的な深みを作る。さらには、故事を踏まえて、昔と今を重ね較べ、そのズレから時空間そのものを嘆じる「幽玄」の視点を重んじるようになる。たとえば、小野小町の「花の色」や藤原定家の「見渡せば」は、あえて実在しない対象を詠っている。

書道や茶道、能や舞もまた、先人に倣うことを通じて、自己を磨くことを求めた。刀鍛冶や陶工などは、技量の向上に精進した。ここにおいて、結果としての作品よりも創作の芸術行為が重視された。それは、禅の「点検」のように、内面の美德の成否を検分するものだったからである。そして、江戸時代になると、一般庶民までさまざまな習い事に励んだ。その背景には、詩書礼楽を重んじる儒教の普及があり、藩校や寺子屋での読み書き算盤、大店奉公での行儀見習いだけでなく、三味線や舞踊、詩吟や長唄、俳諧など、多種多様な芸道へ精進した。とくに絵画については、手習いの独習書も多く出版された。

しかし、ヨーロッパにこんな時空立体的なイメージの豊饒は無い。思うに、ギリシア・ローマ文化は、東のコンスタンティノープル遷都で、ゲルマン人には直接に受け継がれることがなく、ルネサンス以降にしても、フイレンツェ、スイス、パリ、ロンドン、ニューヨークと、文化拠点が移り変わり、とくに大革命以降の国民国家の成立で、バウムガルテンの時代を最後に、知識人最後の牙城、歴史的共通ラテン語文化の教養も失われ、表面的な比率調和以上の美德の伝承が断ち切られたのではないか。それに比して、日本は、大衆化政文化や欧風明治文化まで、京都および各地方の小京都によって、平安時代からの千年の文化的伝統蓄積が多くの人々に基礎教養として普及し、引き継がれていた。

さて、徳育としての芸術だ。プラトンや儒教は、美德を知ることが人間を美德にすると考えた。バウムガルテンは、イメージ協感の中でも英雄やその偉業を讃える「偉大さ」を重視し、天才が努力で着想し構成した作品を通じて観客の内に再思念され、美德として広まるとされた。日本の芸道も、「心ばえ」、すなわち、細やかな感性が行き届いていることを評価した。

しかるに、内的な美德イメージとしての偉大さは、ひとを偉大にするか。もちろん芸術の偉大なイメージに感化され偉業を成し遂げた英雄もいるだろうが、概してまずそれを着想する天才たちはむしろ人格的に欠陥のある場合が多く、また、たとえば「ラ・マルセイーズ」に鼓舞された人々は、ただの暴徒にすぎなかった。同様に、日本でも、芸道に精通した貴族や武人は、あいかわらず傍若無人で、残虐非道も辞さなかった。文人や庶民も、無常もしくは硬直の憂き世にあって芸道で憂き晴らしをしていたのみで、「売り家と唐様で書く」などという戯れ言がささやかれたように、趣味に興じて本業を疎かにすることも少なくなかった。

かように、プラトンや儒教、バウムガルテン、日本の芸道が企図した芸術徳育論は、すくなくとも現在に至るまでは、実績が無い。芸術を通じて内的に美德のイメージを抱いたとしても、そのイメージは、受動的な感性のものにすぎない。それは主体的な意志や行動には直接には結びつかず、人間を美德にすることはなかった。

しかし、内的な美德のイメージに発する意志や行動ではないにしても、むしろ哲学や武道の研鑽などから世に強固な意志を持った美德の人物が現われることもある。そのとき、粗暴な社会では、その善意善行に甘んじてぶらさがり、ただ使い潰すのみだろうが、美德の感性的な理解の深まりがある社会であれば、これを賞賛し支援するだろう。そのときに備えるというだけでも、芸術徳育は無意味ではあるまい。